

# 株式会社吉半 理念文書

磨いて克ち、整えて勝つ

Ver 1.0

令和八年五月三日 確定

代表取締役 吉田 幸市

## はじめに

---

本文書は、株式会社吉半の理念を、社内外に対して明確に示すための公式文書である。

吉半は、戦後にひとりの女性が一代で築き、時代の波の中で一度途絶え、託された意志のもとに再び立ち上げられた会社である。本文書は、その三代の意志を、現代の言葉で書き直したものである。

ここに記す言葉は、装飾ではない。判断に迷ったとき、組織が揺らいだとき、外の声に流されそうになったとき——立ち戻る原点である。

本文書を、毎日の儀式として身体に入れる。スローガンではなく、文化として。

第一章  
**吉半の核**

---

**磨いて克ち、整えて勝つ。**

人が安全に、美しく、本来の力で生きるための土台を、  
実業として作り続ける。

**そして、次代に手渡す。**

これが、吉半のすべての出発点である。

## 第二章

# 吉半の存在意義

---

戦後、ひとりの女性が、毛糸から化粧品へ事業を転換し、一代で会社を築いた。その会社の名は、吉半といった。

時代は変わり、その会社は一度途絶えた。しかし、託された意志は、消えなかった。

私たちは、その意志を受け継ぎ、現代の形で再び立ち上げた会社である。

私たちが信じるのは、人が安全に生きること、美しく生きること、そして本来の力を発揮して生きること——この三つは、別々の領域ではなく、ひとつの土台の上にあるという考え方である。

その土台を、実業の現場で、毎日の仕事として作り続ける。不動産でも、投資でも、利ザヤでもなく、現場で人が育ち、顧客に価値が届く仕組みとして。

そして、その土台は、私たち一代で完結させない。必ず、次代に手渡す。血ではなく、志で。

**これが、吉半の存在意義である。**

## 第三章

# 吉半の使命

---

私たちは、二つの事業を通じて、人が本来の力を発揮するための土台を作る。

### ひとつは、健康と美の事業——MasterKey。

髪、肌、心と身体の内側まで、人が自分らしくあるための日々の手当てを、最高の品質で届ける。銀座の旗艦シップを核に、全国へ、そして世界へ広げていく。

### もうひとつは、モビリティと安全の事業。

道を行く人々が、無事に目的地に到着できるよう、運行を支える仕組みを、現場の知恵と最新の技術で作り返ける。事業者の負担を減らし、ドライバーの誇りを守り、社会の安全を底から支える。

どちらの事業も、根は同じである。

「磨いて克ち、整えて勝つ」——内側を磨き、決めたことを守り、再現可能な仕組みとして整え、長く勝ち続ける。

この姿勢を、私たちは社員と顧客と現場の中で、日々の儀式として身体に入れる。スローガンではなく、文化として。

## 第四章

# 吉半の約束

---

私たちは、いくつかの原則を持つ。これは、何をするかと同じくらい、**何をしないか**を明確にするための約束である。

### 第一の約束

#### **実業にこだわる。**

私たちは、実業の会社である。自社の事業に必要なもの以外の、不動産業、保険業、投資業は行わない。利ザヤで稼ぐ会社にはならない。

なぜなら、人が育ち、雇用が生まれ、次代にチャンスを手渡せるのは、現場で価値を生む実業だけだからである。私たちは、奪えるもので会社を作らない。奪えないものだけで会社を作る。

---

### 第二の約束

#### **自社保有を除き、不動産業を行わない。**

将来、自社の事業に必要な店舗、工場、倉庫、本社——これらは保有することがある。しかし、それは事業の道具であって、事業の本体ではない。賃貸収益や転売益を目的とした不動産業は、私たちの仕事ではない。

---

### 第三の約束

#### **保険業、投資業を行わない。**

他人の不安や期待を商品にして利ザヤを取る仕事は、私たちの仕事ではない。私たちが扱うのは、髪、肌、心と身体の手当て、そして道を行く人々の安全——いずれも、現場で手を動かして届ける、確かな価値である。

---

#### 第四の約束

### 情ではなく、現実で判断する。

経営は、人を救う仕事である。だからこそ、情で判断してはならない。数字を見る目、現実を察する目を、私たちは何より大切にする。やさしさは、判断の後に置く。判断の前に置けば、組織を壊す。

---

#### 第五の約束

### 長期の価値を、短期の利益で削らない。

二十年後、三十年後に残るブランドを作るために、今日の売上で削ってはいけないものがある。品質、顧客との信頼、社員の誇り——これらを毀損する取引は、たとえ目先の利益が出ても、行わない。

---

#### 第六の約束

### スローガンではなく、儀式として文化を作る。

美しい言葉を掲げて、現場が変わらなければ、それは経営ではない。私たちは、決めたことを、毎日の仕事の中で、身体に入れる。文化とは、儀式の積み重ねである。

---

#### 第七の約束

### 新しいことを始めるときは、必ずやめることをセットで決める。

追加するだけの変革は、現場を疲弊させ、組織を壊す。私たちは、新しい挑戦に、必ず「やめること」を伴わせる。これは、社員を守るための、経営の最低限の礼儀である。

---

#### 第八の約束

### 一代で完結させない。

吉半は、誰か一人の個人事業ではない。必ず、次代に手渡す器として作る。社長がいなくても回る組織、磨いて克ち、整えて勝つの哲学が文化として根付いた会社—— これを残すことが、私たちの仕事である。

---

#### 第九の約束

### 血ではなく、志で継ぐ。

後継者を、血縁で選ぶことはしない。今、私たちと一緒に現場で価値を作っている人々、そしてこれから志を共にする人々の中から、次代を担う者が現れる。

私たちが大切にするのは、生まれではなく、その人がどう生きているかである。

## 第五章

# 次世代への招待

---

ここまで読んでくださったあなたへ。

吉半は、今、再び立ち上がろうとしている会社である。一度途絶え、託された意志のもとに再び生まれ、これから二つの事業を本格的に立ち上げ、銀座にフラッグシップを構え、次の二十年を歩もうとしている。

これは、すでに完成された会社の物語ではない。**まさに今、形を作っている会社の物語**である。

だから、ここには、まだ書かれていないページがたくさんある。誰がそのページを書くのか——それは、これから吉半と関わる人々である。

私は、社長として、いくつかのことを決めている。

**吉半は、血で継がない。志で継ぐ。**

**吉半は、利ザヤで稼がない。実業で稼ぐ。**

**吉半は、情で判断しない。現実で判断する。**

**吉半は、一代で終わらせない。次代に手渡す。**

これらは、私が決めたというより、**吉半の血の中にすでにあったもの**を、現代の言葉で書き直しただけである。

もし、あなたが——

社員として、毎日の仕事を通じて、自分自身を磨きたいと願うなら。

顧客として、表面の流行ではなく、本物の価値に手を伸ばしたいと願うなら。

取引先として、短期の取引ではなく、長く続く信頼を築きたいと願うなら。

そしてもし、まだ気づいていなくとも、いつか吉半と志を共にする者として、この場所に呼ばれているなら。

### 吉半の門は、開いている。

私は、あなたが今、何歳で、どんな経歴で、どんな肩書きを持っているかを問わない。問うのは、ただ一つ——**あなたが、自分自身を磨き続ける覚悟を持っているか**ということだけである。

その覚悟がある人と、私は仕事をしたい。

その覚悟がある人に、私は時間を割きたい。

その覚悟がある人に、いつか、この器を手渡したい。

### 吉半は、そのために存在する。

---

代表取締役 吉田 幸市

---

## 株式会社吉半 理念文書

Ver 1.0(公開層)

令和八年五月三日 確定

*磨いて克ち、整えて勝つ。*